

発達障害幼児の集団療育（その4）

—10年の歩みをふりかえっての調査から—

後藤 秀爾¹⁾ 村上 英治 讓 西賢²⁾
深谷 昌子³⁾ 水野 博文³⁾ 柳沢 好子⁴⁾
松原 道世³⁾ 小杉 和江⁵⁾

まなざし—みつめあうために
ことば—はげましあうために
こころ—かかわりあうために
(日本精神薄弱者福祉連盟のスローガンにそって)

I. これまでの療育活動の歩み

名古屋大学の臨床心理相談室の中で、療育の場の保障されていない在宅の障害児を対象に、私どもが集団療育に取り組むようになって10年が過ぎた。就学前の重度の精神遅滞児との取り組みから始まって、ある時期には、より低年齢児の早期集団療育をすすめたこともあった。この数年来は、とりわけ重度・重複児を対象として、試行錯誤を繰り返しつつ取り組んできている。そうした対象児の変遷は、相談室へ通って来る子どもたちの住む地域社会における受け入れ態勢の変遷と相応じてのものである。この10年のうちに、名古屋市及びその近郊では、就学前の障害児の受け入れ態勢が整備され、低年齢児の早期療育も、かなり盛んに行なわれるようになってきたし、また一昨昭和54年度からの養護学校義務化の動きに伴って、重度児も公教育の対象とされてきたため、必然的に、在宅の子どもは、より一層重度の障害をになった子どもに限られてきている。

障害がどのように重かろうとも、すべての子どもに、発達保障の場が準備されるべきであること。また、そうした発達の基盤は、豊かな対人的かかわりあいの場の中

* 本論文の要旨は、東海心理学会第30回大会において報告された。なお本研究をすすめるにあたって、昭和56年度東海学術奨励金の援助を得たことを付記するものである。

- 1) 安城学園女子短期大学
- 2) 名古屋大学大学院教育学研究科研究生
- 3) 名古屋大学教育学部研究生
- 4) 名古屋大学臨床心理相談室
- 5) あつた授産所

から培われていくものであること。そのためには、より早期からの集団体験が意味を持つこと。それらは、前述したような対象児の変遷はあっても、私どもが基本的な理念として持ち続けてきたものである。そうした理念を背景として、これまでの報告の中で私どもは、それぞれの子どもの発達に応じた療育のあり方を求め、二者関係の確立を基盤として展開する集団化へのプロセスを検討し、年間の療育スケジュールのあり方を問いなおしながら、集団療育のあり方とその特質を明確化しようとしてきた。(村上ら 1976・a・b・c, 後藤ら 1977, 1978, 後藤 1979, 村上 1980) さらに、子どもの側からの検討にとどまらず、療育者の側から、療育者と子どもの発達の相互性を論じ(讓ら, 1980)、療育活動の中での母親グループの位置づけと、グループ運営の仕方についての検討も行なってきた。(後藤ら 1980, 後藤 1980)

こうして定式化されてきた私どもの療育は、母子通所形態で、週1回3時間にわたり、自由遊び、設定課題、食事訓練等を中心に、障害児のきょうだいをも含めて、集団体験の場を作っていくというものである。また母親に対しては、集団カウンセリング的な話し合いの場を作る一方で、積極的にグループ運営や企画等にも加わってもらい、より豊かで心の通う療育をめざしてきている。療育者と子どもと母親と、さらには他の家族成員の協力も得て、みんなで作り上げていくグループであることを全体としては志向している。

こうして取り組んできた子どもの総数は、10年間で、実数41名に及ぶ。原則として1年を単位としているが、短い者は半年から、長い者は数年にわたり、公的な療育・教育機関へ移っていく時期を終了の目処としてすすめてきたものである。一方、療育者の側も、大学の相談室での活動であるという事情から、移り変わりが多く、そ

の総数は、50名に及んでいる。

これまでは、とにかく試行錯誤の中で、私どもに、“今できること”を求めて、療育実践を行なってきたが、活動の枠組みは、この段階で一応形をなしてきたように思われる。それ故に、この時点で、これまでの活動をふり返って総括を行ない、これからの新しい展開をはかることは、きわめて大切なことであるように考えられる。このことが、今回、これまで取り組んできた対象児の親たちと、療育者を対象として、この療育活動の成果と今後のみとおしについて、質問紙による調査を行なうことにした所以である。私どもの行なってきた活動が、子どもにとって、母親にとって、また家族全体にとって、さらに療育者自身にとって、どういう意味があったのか、またどういう期待が寄せられてきたのかを、認識し、この活動の位置づけと、今後の方向性を探ろうとすることが、ここでの基本的な検討課題となる。

II. 今回の調査内容と回収状況

私どもの行なってきたこれまでの療育活動に参加してきた子どもの親と、療育者の全員を、今回の質問紙調査の対象とした。質問紙の発送に先立って、連絡先と近況の確認のための電話をいれ、そこで質問紙調査への協力依頼をも行なっている。そして、そこでの情報にもとづいて、10年間の対象児並びに療育者の名簿を作成し、質問紙と同封にて郵送している。発送した質問紙の数は、親の側が、41名の対象児のうち（うち双生児が1組）死亡した2名と、あて先不明の2名分を除いての36通である。一方、療育者の側は、50名分のうち、あて先不明の2名と、質問紙作成の中心となった3名を除いて、45通を発送している。

親に対する質問紙の構成は、おおよそ表1に示したごとくである。原則的に母親に記述してもらうようにし、

表1 親に対する質問紙の内容

<ul style="list-style-type: none"> ・子どもの経歴と変化（療育終了後） ・母親の気持ちの変化（療育終了後） ・療育体験の意味（その当時） <ul style="list-style-type: none"> { 子どもにとって { 母親にとって ・療育体験の意味（その後において） <ul style="list-style-type: none"> { 子どもにとって { 母親にとって ・きょうだいに対する影響 ・家族全体に対する影響 ・その他、希望・期待など
--

表2 療育者に対する質問紙の構成

<ul style="list-style-type: none"> ・当時の担当児について ・担当児にとっての療育の意義について ・療育のあり方についての反省、意見 ・療育者にとっての療育体験の意義 <ul style="list-style-type: none"> { その当時において { その後において ・今後の活動に対する希望・意見など
--

多肢選択形式を多くして、質問内容を汲み取り易くする配慮をする一方で、関連して思いついたことを自由に記載してもらうようなスペースも多くとるように考えた。

療育者に対する質問紙の概要は、表2に示すとおりである。親への質問紙と異なって、大まかな項目をたて、それぞれに自由に意見や感想を記述してもらう形式をとった。

回収できた質問紙は、親の側が、36通のうち32通（うち母親の回答が30通、父親の回答が2通）、療育者の側が45通のうち40通で、共に回収率89%であった。回収し得なかったものについても、それぞれ何らかの形で反応があり、全体に積極的、好意的に受け止められたという実感を得ることができた。

質問紙の発送を行なったのは、昭和56年3月中旬であり、その3月末から、4月上旬にかけて、回答が送られてきている。回答が得られた32名の対象児の4月段階における障害程度、障害の種別、学齢、就園・就学先につ

表3-a 対象児の障害の程度

障害程度	人数
D. Q. 20以下	10
D. Q. 20-40	11
D. Q. 40-60	11

表3-b 対象児の障害の種別

障害種別	人数
単純な精神遅滞	12
身体障害との重複	12
自閉性精神遅滞	5

表3-c 対象児の学齢

学 齢	人数
就 学 前	5
小学校（低学年）	12
小学校（高学年）	5
中 学 校	9
中学卒業	1

表3-d 対象児の就園・就学先

就園・就学先	人数
特殊学級	4
養護学校	17
訪問教育	2
盲学校	2
施設収容	2
通園施設	2
未就園	3

表4 療育者の現状

職 種	人数
大学教員・事務員（心理部門）	6
“ （他部門）	2
教育現場（障害児教育）	4
“ （一般教育）	1
公務員・法人組織（障害児者担当）	10
“ （一般部門）	1
大学院・研究生	5
病院の心理士	4
主婦	6
無職	1

いての概要を示したのが、表3-a, b, c, dである。これまでも述べてきているように、中度から最重度の障害をもった子どもたちであり、その障害の内容はさまざまである。現在最年長児は、今年中学を卒業しているが、行き場がなくて在宅のままであり、就学前の子どものうち2名は通園施設へ、1名は育児の収容施設へ処遇されることに決っている。学齢にある子どものうち、大部分は、養護学校へ通っているという現状である。

一方、回答を寄せられた療育者の現況についてまとめたものが、表4である。多くの者が、現在も何らかの形で障害児との取り組みを続けている。

私どもの手元に寄せられた回答は、総じて熱心なものであり、そこから多くの示唆を得ることが出来た。それぞれが、私どもの療育活動の場から離れて、改めて当時の活動を振り返って、ある程度客観的な立場から評価するという形になっているようである。そうして得られた知見を、親の立場から見た場合と、療育者の立場から見た場合とに分けて、以下検討をすすめるものとする。

Ⅲ. 調査結果のまとめ

1. 親の側から見た療育活動

1) 療育活動のあり方について

母親たちの認識において、療育活動の意味が、どのように受け止められていたかをまとめたものが、表5～表8に示すものである。

表5は、療育活動のどのような側面に、子どもにとっての意味を見出していたかを、また表6は、そうした活動が、どのような意味を持ったと感じているかをたずねたものである。総じて、かなり多様な側面にわたり、多様な意味内容を認めているといえる。その中でも目につく項目は、表5における「お母さんと離れて遊ぶ体験」、「日頃家ではできない新しい体験」、「他の子との接触」

表5 子どもにとっての意味ある体験の内容

〔グループ活動の中で、お子さんにとって意味深かったと思われる体験は、どんなことだったでしょうか。〕

体 験 内 容	選択数
他の子との接触	21 (66)
一対一でのスキンシップ、心の交流	16 (50)
専門的な指導、訓練	10 (31)
お母さんと離れて遊ぶ体験	24 (75)
お母さんと二人で外出する体験	13 (41)
日頃家ではできない新しい体験 (海水浴・ハイキング等)	20 (63)
そ の 他	1 (3)

重複を含む、()内は%

表6 子どもにとっての体験の意味

〔グループの体験はお子さんにとってどんな意味があったと思いますか。〕

体 験 の 意 味	選択数
生活習慣をつけるために	13 (41)
大きい集団へ入る準備として	21 (66)
情緒の安定のために	14 (44)
興味の広がりのために	20 (63)
運動能力の発達のために	11 (34)
心身をきたえるために	11 (34)
そ の 他	2 (6)

重複を含む、()内は%

などであり、表6においては、「大きい集団へ入る準備のために」、「興味の広がりのために」というものであり、生活空間の広がり、新しい体験への広がりといった側面が、療育活動の意味として、母親の中で捉えられることが多いようである。

表7と表8は、同様の主旨で、母親にとっての意味をたずねた結果である。ここでも多様な意味が見出されているが、その中でも、「親同志の交流」の得られたことと、「子どもが専門的指導をうけられるという安心感」の得られたことに、大部分の母親が意味を認めている。そうする中で、母親自身の「気持ちの発散と安定」が可能となり、「心の持ち方を成長させる」ことにつながったと多くの母親が、感じているようである。

私どものグループに通ってくる子どもたちの多くは、ここでの療育が、ほとんど初めての治療教育的体験の場である。障害をもった子どもとその親が、継続的な指導を受けられるという事実そのものが、次のステップへの展開の希望となり、さらに、親同志の仲間が得られるこ

表7 母親にとっての意味ある体験の内容

〔グループ活動全般の中で、お母さんにとって意味深かったと思われる体験はどんなものだったでしょうか。〕

体 験 内 容	選 択 数
障害児をもった母親同志の交流	28 (88)
子どもと二人で週1回通ったこと自体	16 (50)
子どもが専門的指導を受けられるという安心感が得られた	22 (69)
自分の悩みを打ちあけられた	15 (47)
子どもに対する接し方の指導が受けられた	11 (34)
行事等で、海水浴やハイキングなどへ行く機会が得られた	14 (44)
そ の 他	1 (3)

重複を含む、()内は%

表8 母親にとっての体験の意味

〔グループの体験はお母さんにとってどんな意味があったと思いますか〕

体 験 の 意 味	選 択 数
親同志の仲間づくりのために	15 (47)
気持ちの発散と安定のために	21 (66)
子どもとの接し方を考えるために	18 (56)
障害児問題への認識の深まりのために	14 (44)
自分の心の持ち方を成長させるために	21 (66)
そ の 他	1 (3)

重複を含む、()内は%

とで、親自身も成長の方向へと、勇気づけられるという構造を、ここから読み取ることができるであろう。

これらの項目とは別に設けた“療育期間中、最も印象に残った出来事”を自由記述してもらう項目への回答からは、今少し具体的な意味内容を検討することができるであろう。「1時間近く通う道りが大変だった」、「分離不安で泣いてばかりいた」という苦労話と同時に、「生まれて初めてプール遊びをしたこと」、「スプーンをもって食事ができるようになったこと」、「時間はかかったが、慣れて友達の中に入れていけるようになったこと」など、子どもの成長に対する喜びもまた多く述べられている。あるいは、「親から離れて遊ぶ子どもが心配であったが、そのことが私（母親自身）の成長に役立った」という形で、母親自身の成長の場であったことが明確に認識されている場合もある。さらに、子どもの障害が重く、その変化は微々たるものであると感じている場合であっても、「海水浴で、海水の中に体を浸しているこの子の姿を思

い出すにつけ、胸があつくなる」というように、新しい体験を子どもにさせてやれること自体が、母親の喜びにつながるものであることも述べられている。またある母親は、「海水浴は、ひとりが泣けば、他の子がぐずり出すという大変な一夜だったが、先生方の子どもたちを思いやる気持ちにとっても感動した」とも述べている。子どもの背負った障害が重ければ重いほど、母子にとって、療育の場の得られること自体に意味のあることは、いうまでもない。そこで私どもは、何よりも、誠意をこめて子どもたちと取り組むことが、まず療育の基本であることを、改めて銘記したいと思う。

親にとっては、子どもと療育者のかかわりあいを見てそれが、子どもにとって心安らぐ場であることを認めれば、安心して、気持ちが解放されることになる。「子どものことを忘れて3時間、ほかのお母さんたちと楽しく話したり、ゆっくり食事ができるのは、この時しかなく、貴重な時間だった」というのは、母親のホンネのひとつであろう。このように感じられる時間を、母親たちが持てるような雰囲気ของกลุ่มであり続けることを心掛けたいとまた改めて思うものである。

2) 集団療育終了後のつながりと拡がりについて

療育活動を終えて後の母子の生活に、療育活動を体験した事が及ぼした意味についてたずねた結果が、表9及び表10である。

表9は、子どもにとっての意味を指摘したもので、32名中28名居る。具体的にどういう意味を持ったかについて記述のない者が数人居るが、大多数の者は、次の集団（学校、保育園等）へ入るための準備段階になった点を指摘している。「他者とのふれあいにより、精神的なたくましさを身につけ、保育園の入園に際してスムーズにいった」、「母親と離れて、食事をしたり、あいさつをしたり、次のグループに入る準備ができた」、「1番重い子どもを選んで下さったこと、初めて子どもを手離してオロ

表9 その後における子どもにとっての活動の意味

〔お子さんがその後の集団生活の中でやってゆく上でグループに通っていてよかったですと思われることがありましたか。〕

選 択 肢	選 択 数
は い	28 (88)
い い え	0 (0)
わからない	2 (6)
無 回 答	2 (6)

()内は%

表10 その後における母親にとっての活動の意味

グループでの活動の体験がお母さん自身のその後の生活に意味をもったと思われることがありましたか。	
選 択 肢	選 択 数
は い	28 (88)
い い え	0 (0)
わからない	3 (9)
無 回 答	1 (3)

() 内は%

オロしている親と子に、とてもやさしく面倒を見て下さった。その結果、あきらめていた学校へ入れてやりたいと思うようになった」、「これが初めての集団生活で、ここに入れていただいたことが、学校へ行くことにつながった。この子の生活すべてが、このグループから始まったといえる」、「ほかの子どものところにこの子を連れていくと、嬉しそうな顔をしたり、ゴロゴロ転がっていたり、母親の手を引っ張ったりする」など、異口同音に、次の集団へのステップとして機能し得たことを認めている。

表10は、同様に母親自身にとっての意味を指摘した者の数を示す。その具体的な意味内容についても、大部分の者が述べている。全体としてみると、比較的多様な内容であるが、その中でも半数以上の者は、障害児を持つ他の親たちと出会い、交流を深める中で心が開かれていったことをあげている。「いろいろな障害をもつお子さんを知り、そのお母さんの考え方をより多く知った」、「ひとりだけの殻にとじこもることなく、ほかにも同様な親子があることを身を持って知り、心の糧とすることができた」、「障害児を持つ母親たちの集まりによって話しあい励ましあって、物事にくよくよすることが少なくなり、元気づけられた」、「自分だけが大変なのではなく、もっと障害の重い子など、苦労している人の話が聞けて、視野が広がり、障害児の母として生きていく道が開けた」、「親の会などへの参加の意欲が増した」などは、親同志の交流の意味について述べているものと考えられる。

そうした意見に加えて、「子どもをやたらと叱らなくなった」、「自分ひとりで力んでもだめという開き直りも出てきた」、「いろんな面で臆病だった私ですが、少しは強くなったと思う」、「ほかのお母さん方の子どもへの接し方が勉強になった」などの意見も含めると、療育グループでの体験は、障害児を抱えながら生きていく心構えを確立するための場であったとの実感を、ほとんどの母親

表11 その後の親同志の交流

〔グループで知り合ったお母さん同志の交流は積極的に続けられていますか。〕

交 流 の あ り 方	選 択 数
積極的に続けており、いつも誰かと交流がある	4 (13)
自然に顔をあわせる機会が多いので続けている	4 (13)
時々は交流をもつようにしている	12 (38)
たまに会った時に話しをしている	8 (25)
交流をもちたいと思いつつ、その機会がない	10 (31)
特に考えていない	1 (3)
そ の 他	0 (0)

重複を含む、() 内は%

たちが抱えていることを示していると理解される。

親同志の交流の意味について、改めて問い直してみると、大部分の親が認めて、そうした機会の作られることを望んでいる。現実に療育グループで知りあった仲間との交流の有無をたずねたものを、表11に示す。積極的に交流を続けている者は、それほど多くはないが、大部分の者は、励ましあい、相談しあえる相手としての仲間を求めている。次々と、際限なく起こってくる新しい問題に対処していくために、障害児の家族がそれぞれに孤立していないことが望ましいことは、指摘しながらも、実際には、そういう機会を積極的に、主体的に作っていくとするまでには至っていないのが現状であるといえよう。

3) 療育活動に対する家族の受け止め

表12に示したものは、療育グループに母子が通うことに対する家族の協力の姿勢についてたずねた結果である。中には、積極的に援助していたとは言えない場合もあるが、多くは協力的である。

表13には、療育活動が家族に与えた影響の程度が示されている。週1回療育に通うことが、家庭での話題となり、それがきっかけとなって、母親が励まされたり、支えられたりしていることもあるということである。しか

表12 家族の協力

〔週一回通われることについて〕

協 力 の 程 度	選 択 数
非常に積極的に協力してくれた	13 (41)
比較的理解して支えてくれた	8 (25)
黙って見守ってくれた	7 (22)
割と第三者的に眺めていた	3 (9)
どことなく疑問をもって見ていた	0 (0)
無 回 答	1 (3)

() 内は%

表13 家族への影響

お母さんとお子さんがグループに通われることは、家族全体の雰囲気は何らかの影響を与えたと思われますか。

影響の程度	選択数
大きな影響があった	9 (28)
ある程度影響していた	10 (31)
あまり関係なかった	13 (41)
その他	0 (0)

()内は%

し、総じていえば、私どもの療育が、今一步、父親を含めた家族全員を巻き込んだ活動にまで展開していないことについては、反省されねばならない。

また、療育活動へのきょうだいの参加についての意見をも求めたが、年令層も、参加の仕方もまちまちであるため、さまざまな意見が述べられ、数値として示すまでには至らなかった。そうした中でも、一応記述されたものをひろってみると、低年令で、療育活動にもよく参加していたきょうだいの場合、障害児という概念そのものは、判らないままに、自然に仲間に入り、活動を楽しみにしていたことが指摘されている。また、ある程度年令が進んできた場合には、「親の真剣な気持ちに対する理解」、「障害を持ったきょうだいにも、友達や、やさしい先生が居ることを知って安心したこと」、「自分のきょうだい以外にも、障害をもった子の居ることを知ったこと」、「障害児を特別な目で見ないで、いたわりの気持ちを持つてようになったこと」などが指摘されている。ただ、療育時間中、留守番させられることを余儀なくされた場合には、淋しがったり、ひがんだりするような様子もうかがわれ、私どもも、そうした面への一層の配慮をすることの重要性を、改めて認識させられた所以である。

4) 今後の活動についての希望・期待など

すべての親たちが、私どもの集団療育に対し、一定の肯定的評価を与えている。またその後の学校や保育園などでの活動についても、多くの親は、意味あるものとして認めている。現時点では、ほとんどの子どもが、中学生以下であるため、親の方も一応の安定感を得ているように思われる。しかしながら、この4月に中学を終えた子どもや、今しばらくで中学を終えようとしている子どもの場合、「先が真暗。親子でスタートに立って考えて行きたいと思っている。やはり専門的に相談してくれる人が欲しい」、「今年中学を卒業したが行くところがない、このような子どものグループもまた、始めて欲しい」、「子どもの将来を考えれば考えるほど不安になる。熱心

な援助者が欲しい」という要請が、切実なものになってくる。そうした気持ちは何らかの形で、多くの親たちの中にあるためなのか、私どもの活動を長く続けて欲しいと望む声は、意外に多かった。また、半数以上の親が、改めて、同窓会を開くことを、今後の希望として述べている点も注目される。

2. 療育者の側から見た療育活動

1) 子どもにとっての療育体験の意義について

実際に自分が担当した子どもにとって、療育体験は、どのような意義があったと考えているかを、療育者自身に記述してもらったものを、まとめた結果が、表14~17である。ひとりの療育者が、複数の子どもを担当した経験を持つ場合には、それぞれの子どものについて書かれており子どもによって、意義の感じられ方が違う場合には、2通りに換算しており、したがって、表中の人数は、かなり重複している。

表14に示したものは、意義を感じたか否かで分類を試みた結果である。40名中30名は、担当児にとっての直接的な意義を認めている。また、直接担当児に意義があったとは認め難くても、母親にとって、あるいは母親の変化をとおして意義があった認める者が、13名である。そのうち9名は、母子双方にとっての意義を述べており、したがって、両者をあわせて34名は、何らかの形での意

表14 療育体験の意義について

あなたの担当していた子どもにとって、グループ療育はどのような意義があったと思いますか。(表15, 16, 17も共通)

療育対験の意義内容	人数
子どもにとっての意義を認める	30 (75)
母親にとっての意義を認める	13 (33)
認められない、あるいは疑問視する	16 (40)

重複を含む、()内は%

表15 子どもにとっての意義を認める意見の内容

体験の意義内容	人数								
対人関係の ひろがり 深まり	<table border="0"> <tr> <td>他児とのかかわり</td> <td>5 (17)</td> </tr> <tr> <td>担当者とかかわり</td> <td>6 (20)</td> </tr> <tr> <td>集団参加</td> <td>10 (33)</td> </tr> <tr> <td>その他</td> <td>6 (20)</td> </tr> </table>	他児とのかかわり	5 (17)	担当者とかかわり	6 (20)	集団参加	10 (33)	その他	6 (20)
他児とのかかわり	5 (17)								
担当者とかかわり	6 (20)								
集団参加	10 (33)								
その他	6 (20)								
生活の変化とひろがり	10 (33)								
豊かな体験	10 (33)								
基本的生活習慣の確立	2 (7)								

重複を含む、()内は%, 総数30

表16 母親にとっての意義を認める意見の内容

体験の意義内容	人数
母親の世界のひろがり	9 (69)
母親の心の支え	5 (38)
その他	2 (15)

重複を含む、()内は％、総数13

表17 意義を疑問視する意見の内容

疑問の根拠	人数
子どもの変化がみられなかった	10 (63)
マイナスの影響を感じた	3 (19)
その他	3 (19)

重複を含む、()内は％、総数16

義を感じていることになる。しかし、その34名のうちでも、子どもによっては、一概に肯定的な意義を論ずることができないとする者が、10名にのぼる。さらに、6名の者は、療育に肯定的な意義を見出し得なかったものであり、一応16名が、否定的あるいは疑問視する意見ということになる。

表15～17は、それぞれの意見のうちわけを分類して示したものである。自由記述形式の回答をまとめたため、こうした数値となって示されてきているが、記述の仕方にニュアンスの違いこそあっても、きわめて共通の思いが述べられているように思われる。

「その子なりに、在宅のみだった状況から、週に1度というわずかな時間でしかなかったわけですが、車なり、電車、バス、そして歩いて相談室まで来て、友達や私たちのかかわりという場の中で、その刺激を自分のものにしていくたのではないかと思っています。

「所属する集団のできたことがよかったと思う。自分のすぐ隣に、自分に好意をもつ人が居ることを感じるチャンスをもつことができたことが、良かったと思う。好意あるまなざしが、競争心が、こんな中から生まれてきていたように思う。」

「レイちゃんの生活の中のほんの一部にすぎない時間であったと思うが、母親から離される体験、多くの子どもたちの中に入る体験など、ここでの刺激は、“じっとしておれない。私のまわりで何か起こっている。何だろう”という気持ちを、レイちゃんに起こさせる重要な揺さぶりかけになったのではないかと思う。」

「少々自己満足の面もあったのではないかと思う。しかし、全員が、子どもたちを好意的に受け入れており、そこから生まれる人としての対人関係の展開は、その子の人としての成長に絶対プラスであったと思う。」

「発達が非常に遅々としていたアケミちゃん。普通の子だったら1ヶ月で通過するであろう過程を、1年も2年もかけて通

過していった。そんなアケミちゃんだったから、私がつきあった2年間に、こんなことができたという具体的な例をあげて特筆すべきものは何もない。けれどアケミちゃんにとっても、おかあさんにとっても、このグループは、唯一の集団の場であった。ここでの経験はアケミちゃんの発達を、必ずより良い方向へ導いていったと確信している。」

「この療育が、タケくんにとってどんな意義があったのか、今ふりかえてみても、本当にわかりません。ただ、どの子にもあてはまると思うのですが、この療育によって、家庭だけに居たのでは、とても経験することのできない集団との出会い、ふれあい、新しい事物とのかかわりあいが出来たことは、まちがいないと思います。」

「当時は、自分のやっていることが、子どもにどれだけプラスになっているのかよくわかりませんでした。どこへも通ってないのなら、週1回でも、何かしている方がマシだろう位の意識しかありませんでした。お母さんがたは、たしかに明るくなり、生き生きしてくるのですが、子どもたちを見ていると、歩けない子が歩けるようになったわけではなく、これでどうかなるのだろうという気がしました。それなりに子どもも変化してきているのですが、それでは、なんとなく自己満足のよさな気がしました。」

子どもにとっての療育の意義に対し、肯定的な意見から、疑問視する意見まで、代表的なものを列挙してみたものである。たしかに、“療育してよかった、よかった、”というばかりでは、すまないものをそれぞれが感じているように思われる。担当児が発達してきたと思えること、療育時間中楽しげに生き生きと活動している姿に接すること、療育者との間で、出会いとふれあいが実感できることなどによって、何らかの療育の意義を実感することができる。しかし、それだけで“よかった”と自己満足に終わってはいけないとの思いもまた、私どもに共通のものであるといえよう。ただ、その子にとっての療育の手ごたえや、意味あいが実感できること、あるいは、療育の意義を信じられることは、療育者において、活動を展開させていくための動機づけを維持し、高めていく上での重要なポイントとなってくる。「研究者の目」と「療育実践者の目」という背反性をもつ2つの視点の間でのゆれ動きを、前述のいくつかの意見の中に読み取ることが出来るだろう。

しかし、療育者にとって、担当児の動きに、何らの手ごたえも感じられない場合、療育者は、ある意味でひとつのクライシスを体験することになる。レノックス型のてんかん発作が頻発して、変化のきざしすら得られなかったユリコを担当した療育者の記述をあげてみたい。

「“どうしたらいいのだろう”と自問自答しながら、また“重度なんだからしかたがない”というほかの人のことばに失望しながらの取り組みでした。12月頃までは一所懸命、ユリコを抱いてゆったりおぶってゆったりしていました。しかし12月の終わりのクリスマス会の時、私自身相当疲れていて、またユリコの調子も悪くて、その時“ああダメだ。一緒になって落ち込ん

じゃう”と思った時から、たしかにユリコへの思い入れが減少していきました。それからは、ユリコの居ない時の私の方が生き生きしていたのではないかと思います。お母さんが連絡ノートに、“少しでも手足を動かすことになって、刺激となるから、療育に通うことは良いことだと、さるお医者様が、言ってみえた”ということを書いてくれましたが、それだけだったとしたら、大変虚しい思いがします。集団遊びにも入れず、発作のため調子の悪いことが多く、自由に動かしてやることもままならなかったユリコにとって、療育の意義は、自己満足の域を出ないと思えないのです。ただ私にとって救いだったことは、最後の会の時に、ユリコが私にしがみついてきたことでした。やっとユリコにとって信頼できる人になれかけたのかしらと思えた瞬間でした。」

変化の認められない子どもを担当した療育者は、多くの場合、これと同じような思いにとられるのであろう。ただ重要な点は、それをどう療育者の中で処理して、子どもとの取り組みに心をこめていけるかということにあるように思われる。別の年にやはりユリコを担当した療育者の記述と、ユリコよりむしろ障害の程度としては重い、変化も見えてこないリカを担当したふたりの療育者の記述を、次にあげてみよう。

「ユリコにとって、直接的に療育の意義があったかどうかかわからない。ただ食事をさせてあげて、おしめをかえてあげて、散歩したり、グループの輪の中に遊びに入ったり、お世話してかわいがってあげただけのような気がする。ほかの療育者によって私が、支えられていたと思う。しかし、その世話をする母親にとって意義があり、それがユリちゃんにも反映されたと思う。療育者に可愛がってもらえるようにと、かわいく見えるような服装をさせてきたと言うのを聞いて、そんな母親の気持ちや配慮に、胸を打たれたことを思い出します。」

「リカちゃんが、他児から影響を受けたとか、私との間に何らかの情緒的交流があったなどは、どう過大評価しても、決して言えることではない。しかし、何の変化もなかったそれまでの生活に、1週間の生活リズムが出来、リカちゃんにとっての生活が、それなりに生き生きと展開しはじめるひとつのきっかけになったのではないかと思います。」

「家の中だけに限られていたリカちゃんの世界が、療育を通じて外に広がっていったと思う。とはいっても、リカちゃんの状態をみて、目に見えるような発達、たとえば、寝返りができるようになったとかいうことは、みられなかった。むしろリカちゃんと2人3脚で生きているおかあさんの世界が、療育を通じて広がったということが、リカちゃんにとって大きな意義があったのではないだろうか。」

集団療育の意義は、母親にとってのもの、子どもにとってのもの、他の家族成員にとってのもの、また療育者自身にとってのものが、それぞれ別個に論ぜらるべきものではない。子どもを取り巻く人間関係のすべてが一体となって相互にからみあいながら、ダイナミックに動きはじめることこそが、大切であることを、今一度確認しておきたい。重い子どもを抱えて苦しむ母親をさておいて、療育者がまず落ち込むようなことは、本来あっては

ならないことである。子どもの置かれた全体状況を視野に入れながら、子どものひとつひとつの発達段階を豊かに充実させていくことに、目を向けることが、重要な視点のひとつである。

加えて、今ひとつの大きな課題は、中断事例の問題である。ヨシオは、外界刺激に対し、きわめて過敏で、不安に陥り易い、みるからにひ弱な印象を受ける、自閉傾向の子どもであった。そのヨシオの担当者の記述を、次にあげてみよう。

「療育の意義についてどういったいいのかよく判りません。ヨシオにとっては、マイナスの場ではなかったのかも知れません。お弁当の場面を印象的に思い出しますが、食べようとしませんでした。母親としては、好物を食べやすいように工夫して、持たせてくるのに、観察室から見ていると、療育者のやり方がヘタのせいと思えなかったのでしょうか。“私にやらせてほしい”と何度もいわれ、療育者の意見もわかれて、とにかくどうしたら食べるかアレコレやってみて、彼はマスマス食べることに抵抗したのです。こういうグループに親が見切りをつけたのではないかと思います。」

このヨシオの場合、結局のところ、私どものグループとは、かみあわずに、離れていってしまったのだが、母親自身の抱えている心理的問題、子どもの障害のあり方などを考えると、小集団での療育以前に、個別の心理治療が不可欠な事例も、少なからずあることを考えさせられるものである。

2) 療育者にとっての療育体験の意義について

療育者が、療育グループに参加していた当時においてそのことが、自分自身にとってどのような意義をもったと思うかをたずねた結果を、表18にまとめた。40名のうち、1名の“お手伝い程度の参加だったのでよく判りません”という意見を除いて、全員が、程度の差こそあつ

表18 その当時の療育者にとっての意義についての意見

「療育に参加されていた当時のあなたにとって、療育体験はどのような意義があったとお考えですか。(表19も共通)」

体験の意義内容	人数		
人間観に影響	19 (50)		
障害児観 に影響	} 24 (63)		
		障害児者の存在の認識	3 (8)
		障害児との距離の変化	6 (16)
		障害児に対する姿勢を学んだ	14 (37)
障害児の家族への認識	3 (8)		
その他	2 (5)		
自己分析の機会	8 (21)		
対人的世界のひろがり	12 (32)		
その後の職業、生活への方向づけ	3 (8)		

重複を含む、()内は%, 総数39

でも、何らかの意義を見出している。広くいえば、障害児に対する見方、人間に対する見方、発達についての考え方などが、この子たちと取り組んできたすべての療育者の中で、変容し、あるいは確立されていったものと理解される。

約半数の者にとっては、この療育体験が、障害児と取り組む最初の体験となっており、そこで大きく揺り動かされ、その後の方向づけを得ていく過程が認められる。

「私にとっては、障害児の治療教育にかかわるイニシアル体験であり、今でも私にとっては最初の貴重な体験として残っている。ふりかえってみれば、私自身もその当時、内的にいろいろな問題をかかえていたので、子どもたちの生きる姿を見ることが、お母さんたちとかかわることは、私の心の支えともなっていたと思う。」

「苦しみ悩んでいる人や子どもがいるということ、そして、そのそれぞれの苦悩を克服しようとかんがっている人がいること、克服し、ハッとさせられるぐらい明るく生き生きと生活している魅力的な人がいるということを知りました。」

「療育活動そのものが、自分にとってまったく初めての非常に新鮮な体験だったと思います。はじめは、療育活動の中で子どもやお母さんや、仲間とのかかわりあいというものが、それまでの自分の日常生活とは異質のものに感じられたのですが、次第にその体験の中で、“人間とは”、“人と人のかかわりとは”といった普遍的な問題を自然に考える機会を得るようになりました。日常生活の中で、何となく流されてしまっていることを、療育の中で考えるきっかけを与えられたという感じがします。」

「まず、こういった子たちの両親がいかに大変な毎日を送り、しかし、子どもの為がいかに一所懸命であるかを痛感させられたことは、“いい経験”になったと思います。そしてまた、この子たちに開かれた場のあまりに少ないことも知りました。つまり私にとっては、こういう子たちの生きる世界に触れ、そういったものを理解することはできたのですが、しかし、私が、彼らにどんな援助ができるか……何もできない、できなかったという思いも残っています。」

また、ある程度の臨床実践の経験をもつ者の場合も、重度の子どもに、何人かの仲間と、チームを組んで取り組んでいくという体験の中から、さまざまな成長の糧を汲み上げていっているものと理解できる。

「特殊学級を担任して2年目であった私は、障害児に対するメカニクな指導技術を求めていたように思います。このことに対して、今この子の伸びる力を援助するには、何をしてあげるのがよいのだろうかというも、子どもの動きの中から教えを乞う姿勢を大切にするようになった私でした。」

「彼らを理解すること、彼らとかかわることは、本当にむづかしい。とにかく私自身の感受性と人間性が何よりも問われるのですから。ともすると一方的な働きかけに終始しがちな私にとっては、まず待つこと、真剣な気持ちで問いかけ、耳を傾けることの必要性を実感できたことが大きな収穫でした。」

「自分にとって、療育体験は、ひとつの情緒的な安定の場であったのかも知れないと今、思いかえしてみています。自分の他の生活場面での体験から離れて、グループでの活動中は、と

もかく担当している子どもたちに目を向けようとする中で、自分の気持ちを切りかえ、コントロールする力を養うのに役立つような気がします。それに、ほかのメンバーの子どもに対する接し方は、自分が実際に子どもと接する上での参考になりましたし、いろいろな子どもたちや、スタッフの個性や生き方に触れ、自分を振り返る良い機会になっていたように思います。」

「それまでのボランティア的取り組みではなくて、おのれが主体的に活動を作り出していく体験が出来たことは貴重であった。“この子らと共に生きていこう”というおのれの方向性を確信し得た気がします。」

子どもとのかかわりそれ自体の中からだけでなく、仲間とのふれあい、話しあいの中で、相手から療育理念や技術を吸収し、相互に研鑽しあい、また自分たちで活動を作り上げていく場であることによって、私どもひとりびとりの成長が、生じてくるものとなっていたことがここに、確認できるように思われる。

そして、こうした体験が基盤となって、療育者のその後の人生が、多かれ少なかれ方向づけられていく。障害児関係の仕事に入り込んでいった者も数多く、またそうでない者も居るが、ほぼ全員が、その後の生活につながる意味を、この療育体験に見出している。そのうちわけを示したものが、表19である。その影響の受け方も、人により実に多様な側面と水準を持っている。障害児問題に対する理解の目が出来たという者、人に対する見方や接し方が変わったという者、障害児との取り組みの道へ入る方向性を与えられたという者、療育グループでの活動を基礎に、それを踏襲し、あるいは止揚しつつ新しい活動を目ざしている者など、さまざまな展開を示している。しかし、どの場合においても、この療育グループでの体験が、家庭へ入ってからの育児においてでも、心理臨床関係の活動にたずさわっていく上においてでも、かなり、原体験的な機能を担っていることの多いことが、確認できる。この点については、かなり異口同音に共通のことが、述べられているので、そのひとつを例にあげて、理解の助けとしたい。

「現在通園施設に勤務中ですが、療育グループの共通な理念のようになっていた、その子自身が楽しく生き生きと、また伸び伸びと生活できるようにという思いを抱いて、子どもたちと

表19 現在の療育者にとっての意義についての意見

体験の意義内容	人数
人間(障害者も含む)に対する見方、姿勢	20 (50)
自分自身の心の支え	6 (15)
その後の職業・生活への方向づけ	11 (28)
その他	7 (18)

重複を含む、()内は%

毎日を送っています。施設職員はともすると、身辺自立の面を重視しがちであったり、ひとつの行為ができるかできないかで子どもを見るという態度に陥りがちであったりするのですが、グループでの体験を通して、そうした見方ではなく、子どもの意欲を伸ばし、情緒の安定をはかるといった面から、子どもをとらえることが、自分にはできるようになったと思います。それから、重度の子どもたちとのかかわりあいの体験によって、子どもたちの内的な変化をもとらえようとする姿勢が持てたことも、私にとっての収穫だったと思います。しかし、一番大きな意味としては、グループの体験で、子どもとつきあっていく楽しさや面白さを知ったことではないかと考えています。それが今の職業につく基盤となったようにも思います。」

3) 療育グループの活動のあり方について

療育グループのこれまでの活動についての反省をふまえて、今後に向けての希望、期待、感想、意見等の記載も求めたところ、全員がそれぞれ、積極的な意見を述べてくれた。

ほとんどの者が述べているのは、療育者の養成についての期待である。自分たちがこうした体験の中で育ってきたという実感が、次に続く後輩を育てて欲しいとの希望になって、あらわれてきているように思われた。

また研究活動についての期待も、かなりの者が述べている。療育の方法について、障害児の発達過程について、あるいはオモチャなどの紹介を通して、生活に結びついた指導をして欲しいとの声も目につく。大学の中での研究にとどまらず、その成果を社会に返して欲しいとの意見もあった。

また、地域とのつながり、さらにより大きな輪としての拡がりをもっと考えるべきだとの意見も何人かの者は熱心に述べている。そのほかにも、療育活動の内容についての提言もいくつかあったが、とにかくいつまでも、こうした活動を続けていくことが必要だとの認識は、ほとんどの者に共通のものとしてあるように、受け止められた。

これらは、大学の相談室での活動という状況の中で、その特質をどのように生かし、またその限界をどのように克服していくかという問題に収約されるものと思われる。私どもが現在置かれた場の中で、どういう方向性を持って、どのような役割をとっていくべきかという点こそが、検討されねばならない。

IV. 今後の療育活動の課題と方向性について

1. 最重度児の発達を捉える視点を明らかにすること

私どもは、重度・最重度の障害児にとってもまた、医学的な処遇のみでなく、治療教育的視点からの集団療育が必要であることを述べてきた。そうした重度児に“集

団”が、どのような意味を持つのかについての疑問は、私どもの仲間の中からも提起されてきた。そうした疑問に対し私どもは、これまでも述べへきたように、療育の成果は、当の子どもを取り巻く対人的状況全体のダイナミックスを動かせるかどうかという側面から評価されるべきであると答えてきた。そうする中で、子どもの目に見える変化はなくとも、その子が生きている世界の充実することで、その子なりの次の発達につながるものだと信ずるが故にである。

しかし、そうした動きが、子どもの次の発達につながっていくものであり、あるいは、子どもの中でのわずかな表情の変化や、活動性の変化が、一時的なものではなくて、次の発達への動きであるという確証もまた、私どもは得たいと思う。母親や療育者にとってのメリットが子どもの発達に具体的にはどのように反映されてくるのか。また子どものちょっとした動きの中から、どのような次の発達への芽を読みとり、それに対しどのように働きかけていけばいいのか。とりあえず、私ども自身の、そうした重い子どもの発達を捉える方法論ないしは、発達を捉える目を養成するための方法論の確立、さらには子どもの発達援助のための方法論の再検討もまた、今後引き続き私どもの課題となってくるものである。

2. 療育者育成の場としての充実をはかること

私どもの療育グループに対するニーズのひとつとして、療育者の訓練・育成の場であることが、多くの人から指摘されていた。障害児と実際に取り組むこと自体が、すでにそれに取り組む者の障害児観、人間観をゆさぶるものとなることはいうまでもない。しかし、ただそれだけでなく、療育者の成長のプロセスと、そのためのシステムを検討し、明確化することを進めつつ、成長の場としての充実をはかることが必要とされるだろう。

かつて、東山紘久が、“心理臨床家の集い”（1979年、於名古屋大学）のシンポジウムの中で、心理治療家の成長過程を、3段階に分けて、〈体力と情熱の時代〉、〈技術の時代〉、〈理論化の時代〉と呼んだことがあった。療育者としての基礎は、ある意味で、〈体力と情熱〉であるとも言える。障害児のより豊かな発達を願ってひたむきに取り組めるような、情熱と人間性の発掘と育成は、もっとも基本的な主題として考えられねばならない。そうした療育姿勢に加えて、基礎的な療育技術の体得もあわせて、相互研修の場としていくために、療育グループのすすめ方を今少し検討することも必要である。ただ、その根底にあるものは、常に、子どもの動きを、いかに内面深く理解し得るかという、療育者としての授けか目の育成であることを改めて確認しておきたい。

3. 療育終了後の時間的つながりを作ってゆくこと

現時点において、多くの親たちは、療育終了後、相互のつながりを持ちたい、何かの折には相談したいと思いつつ、事実上、それぞれが孤立している状態にあるといえる。療育者も親も含め、これまでも、療育グループの行事の折には、先年度のメンバーの参加をも呼びかけ、また折に触れて名簿を作って、つながりを続けていくように心掛けてはきたものの、充分なことではできず、結果的に母親相互の問題としてまかせてきたという経過がある。しかし、今一步、積極的に関与し、核作りをしていくことを考えない限り、現在以上の展開は望みにくい状況にあると認識される。とりあえず、全員を集めての同窓会を企画しようとしているが、そこから具体的にどう展開させていくかは、ひとつの難しい課題である。

療育グループを終えて、公教育機関へ入ったとしても、子どもと両親は、常に新たな悩みや苦しみに直面しつづけているのが現状であり、まして義務教育の期間を終えてからは、まさに行き場を失ってしまわざるを得ない。そうした問題に私どもが直接立ち向かうことは、今まだ、できないが、そうした状況でこそ、グループの中で生まれた親同志の、また療育者と親との交流と連帯を大切にしたいとただ、そのように考えるのである。

4. コミュニティに根ざした活動をめざすこと

先の時間的なつながりを、縦の軸として、そこから横への拡がりを、私どもの大きな課題のひとつとしなければならぬ。大学の相談室での活動は、利害にとらわれない、恵まれた状況のもとで、大学の権威とそれへの信頼感を背景に行なうことができるというメリットを持つ反面、地域に根ざした、親の主体的動きを基盤としての活動になりにくいという大きな弱点を持つことが、確認されてきている。

この点を克服していくための、いくつかの方向性は、ここで提起することができる。第1に、私ども自らが、積極的に地域へ出て行って、いわばコンサルテーション活動を行なうことであろう。近年注目されてきたコミュニティ心理学の方向性である。私どもの仲間のうち何人かは、また、このグループから巣立っていった療育者の何人かは、それぞれ個人的な水準では、こうした地域へのアプローチに取り組んできている。しかし、真の意味で地域に根ざした活動、すなわち、ただ障害児の家の近くで療育を行なうというのではなく、その地域の親たちの主体的動きによると同時に、近隣の人たちに働きかけ、理解を求め、さらにまた、逆に地域からの援助を受けつつ継続されていくような療育活動を作っていくことは、きわめて困難な作業であると言わざるを得ない。まして、

重度児の場合には、私どもが地域へ出向いていって介入すべき組織の断片すらもないのが現状である。

したがって今少し現実的な活動を考えれば、療育グループから他の公教育機関へ移って行った子どもたちのアフターケアを強化することであろう。学校、通園施設、保育園との連合を、これまでも心掛けてはきているが、十分に行なうだけの余裕が持てない。加えて、経験年数の浅い療育者の場合、そこまでの視点を持ち得ないで来たということもある。そうした機関との調整能力も、療育者養成の重要な視点として取り入れていくべきであろうと考えるに至っている。

今ひとつ考えられることは、今まで積み重ねてきた私どもの活動をより有機的に体制化していく方向性である。私どものグループに関与して行った母親たち相互の連携をとることのテコ入れをすることを通じて、いわばネットワークを作って、そこからの拡がりを期待するものである。コミュニティに根ざした活動を真に目指す以上、単にシステムを整備することよりもむしろ、親からの自然で主体的な活動の意欲を具体化し、まとめていくことが大切であると思われる。そのためには、かなり長期的視野を持って今後の活動を続けていくことが、重要な課題として浮かびあがってくる。

おわりに

集団療育も10年続けてくると、さらにやらねばならぬと思えることが、次から次へと出て来て、そのすべてには対応しきれぬ自分たちの無力、微力が嘆かれてくる。乗り越えるべき課題は多いが、無理に活動を拡げても、私ども自身のアイデンティティの方が、むしろ拡散してしまう。私どもの現在置かれた位置を見定めて、自分たちのとるべき役割をしっかりと確認しながら、息長く続けることが、こうした活動の最終的には肝要な点であるように思われる。

とりわけ今年は、国際障害者年である。“完全参加と平等”のスローガンは、私どもみんなの理想である。それがお題目に終わらないために、“自分自身もまた障害児(者)である”との認識から、すべての人がスタートすべきではないかと思う。世の中に完全な人間などいないのだから、その限りにおいて、生きている者は、すべて同じ地平に立つ仲間である。そういう主張が、きれいごとではなく、ごくあたりまえのこととして、受け止められるような社会であることを願いたい。重い障害児を大切にできる社会は、私ども自身の人間性を大切にできる社会であるが故である。

調査に御協力いただいたお母さまが、療育にあたった担当者のかたがたに心からなる感謝を捧げるとともに、この療育の

発達障害幼児の集団療育（その4）

場を築いたすべての子たちの、生き生きとした成長発達のがたを祈念してやまないものであります。

文 献

- 村上英治・後藤秀爾・江口昇勇 1976・a 発達障害幼児の集団療育（その序説）名古屋大学教育学部紀要（教育心理学科）23, 39-43.
- 村上英治・後藤秀爾ら 1976・b 発達障害幼児の集団療育（その1）——かかわりスケールにもとづく発達のとらえ——名古屋大学教育学部紀要（教育心理学科）23 45-64.
- 村上英治・江口昇勇ら 1976・c 発達障害幼児の集団療育（その2）——2者関係の確立を基盤としての集団志向へ——名古屋大学教育学部紀要（教育心理学科）23 65-83.
- 後藤秀爾・村上英治ら 1977 発達障害幼児の療育合宿——日常の療育活動との関連の中で——名古屋大学教育学部紀要（教育心理学科）24 179-192.
- 後藤秀爾・村上英治ら 1978 発達障害幼児の集団療育（その3）——集団への入り込みの悪さを主題として——名古屋大学教育学部紀要（教育心理学科）25 189-204.
- 後藤秀爾 1979 発達障害幼児の集団療育について——集団事態と発達課題——日本教育心理学会第21回総会発表論文集 1016-1017.
- 村上英治 1980 「集団」の場での遊戯治療ということ成瀬・河合・佐治編・ケース研究3・和知論文へのコメント 誠信書房
- 讓 西賢・村上英治ら 1980・a 重度・重複障害幼児の集団療育（1）——子どもとのかかわりをとおしでの療育者の動き——名古屋大学教育学部紀要（教育心理学科）27 115-124.
- 後藤秀爾・村上英治ら 1980・b 重度・重複障害幼児の集団療育（2）——グループ参加をとおしでの母親の動き——名古屋大学教育学部紀要（教育心理学科）27 125-134.
- 後藤秀爾 1980 発達障害児の集団療育——地域療育グループのあり方をめぐって——日本教育心理学会第22回総会発表論文集 986-987.

（1981年7月31日 受稿）

4) - a グループを終えられてから現在までに、集団生活や家庭生活の中で、一番つらかったのはどんなことだったでしょうか。以下具体的に書いて下さい。

{ }

4) - b そのつらい時期を、主としてどのように乗り越えられましたか。以下の中から選んで○印をつけて下さい。重複してもかまいません。

- イ) この子どもを心の支えにして
- ロ) この子どものきょうだいに励まされて
- ハ) 家族が精神的な支えとなって（特にどなたでしょうか_____）
- ニ) 障害児をもつ母親同志で支えあって
- ホ) 近隣の人たちの親切に支えられて
- ヘ) 相談機関に相談して（相談機関名_____）
- ト) 担任の先生に相談して
- チ) 自分ひとりの胸におさめて
- リ) その他（_____）

5) - a グループを終えられてから現在までに、お子さんのことで一番うれしかったことは、どんなことだったでしょうか。以下具体的に書いて下さい。

{ }

5) - b そのうれしい気持ちを、まず誰に伝えられましたか。以下の中から選んで○印をつけて下さい。重複してもかまいません。

- イ) まずこの子ども自身に
- ロ) この子どものきょうだいに
- ハ) 家族に（特にどなたにでしょうか_____）
- ニ) 同じ障害児をもつ母親に
- ホ) 近所で親しくつきあっている友達に
- ヘ) 相談機関の先生に（相談機関名_____）
- ト) この子をいつもみている先生に
- チ) 誰にも伝えなかった
- リ) その他（_____）

6) 実際に相談したかどうかは別として、そうしたつらい時にまず一番に相談にのってもらいたいと思ったり、うれしいことがあったりした時にまず伝えたいと思う相手はどういう人でしょうか。以下の中から選んで○印をつけて下さい。重複してもかまいません。

6) - a 子供の成長や処偶の問題については

- イ) まず、この子ども自身に
- ロ) この子どものきょうだいに
- ハ) 家族に（特にどなたでしょうか_____）
- ニ) 同じ障害児をもつ母親に
- ホ) 近所で親しくつきあっている友達に
- ヘ) 相談機関の先生に（相談機関名_____）
- ト) この子をいつもみている先生に
- チ) 誰にも伝えない
- リ) その他（_____）

6) - b お母さん自身の気持ちを聞いてもらうには

- イ) まず、この子ども自身に
- ロ) この子どものきょうだいに
- ハ) 家族に（特にどなたでしょうか_____）
- ニ) 同じ障害児をもつ母親に
- ホ) 近所で親しくつきあっている友達に
- ヘ) 相談機関の先生に（相談機関名_____）
- ト) この子をいつも見ている先生に
- チ) 誰にも伝えない
- リ) その他（_____）

Ⅲ - A M.R. (S.S.) グループ体験の意味

（その当時）

このグループに通っていた時期に、そのことがお子さんやお母さんにとってどんな意味があったと思われるかということについておたずねします。

7) グループに通ってみえる間で、最も印象に残っているできごとはどんなことでしょうか。思い出されるまま、できるだけ具体的におきかせ下さい。

{ }

8) - a グループ活動の中で、お子さんにとって最も意味深かったと思われる体験はどんなことだったでしょうか。次のイ)～ト)から選んで○印をつけて下さい。重複してもかまいません。

- イ) 他の子との接触
- ロ) 1対1でのスキンシップ、心の交流
- ハ) 専門的な指導、訓練
- ニ) お母さんと離れて遊ぶ体験
- ホ) お母さんと2人で外出する体験
- ヘ) 日頃家ではできない新しい体験（海水浴、ハイキング等）
- ト) その他（ ）

8) - b グループでの体験は、お子さんにとって主としてどんな意味があったと思いますか。○印をつけて下さい。重複してもかまいません。

- イ) 生活習慣を身につけるために
- ロ) 大きい集団へ入る準備のために
- ハ) 情緒の安定のために
- ニ) 興味の拡がりのために
- ホ) 運動能力の発達のために
- ヘ) 心身をきたえるために
- ト) その他（ ）

9) - a グループ活動全般の中で、お母さんにとって最も意味深かったと思われる体験はどんなものだったのでしょうか。○印をつけて下さい。重複してもかまいません。

- イ) 障害児をもった母親同志の交流
- ロ) 子どもと2人で週1回通ったこと自体
- ハ) 子どもが専門的指導を受けられるという安心が得られたこと
- ニ) 自分の悩みを打ち明けられたこと
- ホ) 子どもに対する接し方の指導が受けられたこと
- ヘ) 行事等で海水浴やハイキングなどへ行く機会が得られたこと
- ト) その他（ ）

9) - b グループでの体験は、お母さんにとって、主としてどんな意味をもっていたと思われますか。○印をつけて下さい。重複してもかまいません。

- イ) 親同志の仲間づくりのために
- ロ) 気持の発散と安定のために
- ハ) 子どもとの接し方を考えるために
- ニ) 障害児問題への認識の深まりのために
- ホ) 自分の心の持ち方を成長させるために
- ヘ) その他（ ）

Ⅲ - B M. R. (S. S.) グループ体験の意味 (その後において)

グループに通っていたことが、お母さんやお子さんにとって、その後どんな意味をもっていたと思われるかということについておたずねします。

10) - a お子さんがその後の集団生活の中でやっていく上でグループに通っていてよかったと思われることがありましたか。次の中から1つ選んで○印をつけて下さい。

- イ) はい
- ロ) いいえ
- ハ) わからない

10) - b よかったと感じられるのは特にどんな時でしょうか。具体的におきかせ下さい。

{ }

11) - a グループの活動の体験が、お母さん自身のその後の生活に意味をもったと思われることがありますか。次の中から1つ選んで○印をつけて下さい。

- イ) はい
- ロ) いいえ
- ハ) わからない

11) - b 意味があったと思われるのは特にどんな点についてでしょうか。具体的におきかせ下さい。

{ }

12) - a グループで知り合ったお母さん同志の交流はその後も続けられていますか。次のイ)～ト)から1つ選んで○をつけて下さい。

- イ) 積極的に続けており、いつも誰かとの交流がある。
- ロ) 自然に顔を合わせる機会が多いので続けている。
- ハ) 時々交流をもつようにしている
- ニ) たまに会った時に話をしている
- ホ) 交流をもちたいと思いつつその機会がない
- ヘ) 特に考えていない
- ト) その他 ()

12) - b 交流が必要だと思われる場合には、そこにどういう意味を感じてみえますか。具体的におきかせ下さい。

{ }

IV きょうだい関係

このお子さんが、グループに通っていた頃のきょうだいに対する影響についておたずねします。

13) - a このお子さんが毎週グループに通うことに対してきょうだいはどのように理解し受けとめていたと思われますか。具体的におきかせ下さい。

{ }

13) - b きょうだい自身が時々（あるいは毎週）グループの活動に参加する機会を私どもも持つようになってきましたが、そうしたことは、お子さんにどんな影響を与えたと思われますか。（特に、障害をもった自分のきょうだいに対する見方に何らかの影響があったと思われますか。）具体的におきかせ下さい。

{ }

V 家族の援助・協力

お父さんをはじめとする他の家族の方は、お母さんとお子さんがグループに通われることをどのように受けとめていたかについておうかがいします。

14) 週1回通われることについて、次の中から1つ選んで○印をつけて下さい。

- イ) 非常に積極的に協力してくれた
- ロ) 比較的理解して支えてくれた
- ハ) 黙って見守ってくれた
- ニ) 割と、第三者的に眺めていた
- ホ) どことなく疑問をもって見ていた
- ヘ) その他 ()

15) - a お母さんとお子さんがグループに通われることは家族全体の雰囲気は何らかの影響を与えたと思われますか。次の中から1つ選んで○印をつけて下さい。

- イ) 大きな影響があった
- ロ) ある程度影響していた
- ハ) あまり関係なかった
- ニ) その他 ()

15) - b 影響があったとしたら、それはどういう影響だったと思われますか。具体的におきかせ下さい。

{ }

VI その他、今後のグループに対する

希望・意見など

今後の私どものグループの活動に対して希望・期待・御意見などをおきかせ下さい。

16) グループの運営の仕方について、こうした方がいいと思う点がありましたらおきかせ下さい。

{ }

17) グループを卒業した仲間に対する働きかけとしてもっとこうしてもらいたいと思う点がありましたらおきかせ下さい。

{ }

18) その他何でもお気づきの点についておきかせ下さい。

{ }

〈付表 2〉

MRグループ療育経験者へのアンケート調査

I MR (SS)グループの療育活動をめぐって

1. あなたがグループで担当された子はどんな子でしたか。(心に残るエピソードなどもそえて、具体的に御記入下さい。)
2. あなたは、その子に対して、どんな療育のねらいをお持ちでしたか。
3. あなたは、その子にとって、このMR (SS)グループの療育はどんな意義があったと思いますか。
4. 療育全体を通して、印象深く残っていること(行事・企画など)があれば御記入下さい。(子どもとの関係ばかりでなく、母親との関係、療育者同志の交流などについても触れて下さい。)
5. あなたが参加されていた当時の療育方針・形態、企画などについて、「こんな風にすればよかった」と思うことがあれば御記入下さい。
6. これからの私どものグループ療育活動に対して、期待されることがあればどんな点についてでも結構ですから御記入下さい。

II 療育者にとってのグループ療育体験の意義について

1. その当時のあなたにとって、療育体験は、どのような意義があったとお考えですか。
2. それは、療育活動のどのような活動と関連が深かったと思われますか。
3. その当時のあなたにとって、療育活動を体験して、人間観や障害児観に影響が与えられましたか。与えられたとすれば、どんな点についてでしょうか。
4. それは、療育活動のどのような活動と関連が深かったと思われますか。
5. 直接、こうした障害児療育にかかわると否にかかわらず、現在あなたにとって、このグループでの療育体験が、何らかの意味をもつものであるとしたら、どのような点においてでしょうか。職業生活の上でも、日常生活の上でも、何でもかまいません。感ずるところを御記入下さい。

THE STUDY OF THE GROUP THERAPEUTIC PRACTICE WITH THE MENTALLY HANDICAPPED CHILDREN

– through the questionnaire survey of their mothers and therapists –

Shuji GOTO, Eiji MURAKAMI, Saiken YUZURI, et al

This decade, we have tried the group-therapeutic-practice at Nagoya University Psychological Clinic with the mentally handicapped children who had no psychological care with their mothers. For this period we have worked with 41 children and 50 therapists.

In this study, we examine the significance of our group-therapeutic-practice for these ten years and the direction of our group-therapeutic-practice through the questionnaire survey of their mothers and therapists for the future.

Subjects are all these mothers and therapists except those who we couldn't contact with. The questionnaires were sent by mail to the subjects and after being answered they were sent back by mail.

We received 32 answers from mothers and 40 answers from therapists. The results are as follows.

I The results of the survey for mothers.

a) The effects of joining our group.

Most of mothers feel that the life-spaces of their children have extended through the group-therapeutic-practice and that they could obtain the security and the feeling of solidarity one another.

b) The effects on their lives after the group-therapeutic-practice.

28 mothers feel that the group-therapeutic-practice had good effects on their lives after the group-therapeutic-practice.

c) The effects of joining our group on siblings of their handicapped children.

Most of mothers feel that the siblings of their handicapped children have become more acceptable for handicaps.

II The results of the survey for therapists.

a) The significance of our group for the handicapped children whom the therapists took charge of.

34 therapists find that the group-therapeutic-practice was effective for the handicapped children. 6 other therapists feel that the group-therapeutic-practice was not expected effectiveness for the handicapped children for the severity of their handicaps or the frequency of their absence.

b) The significance of our group for the therapists themselves.

It was the first experience as clinical practice for most of the therapists to work for our group as a therapist. Therefore all of the therapists find that joining the group-therapeutic-practice and the handicapped children made themselves grow.

c) The significance of our group on their lives after the group-therapeutic-practice.

All of the therapists find that working for our group as a therapist was effective for their lives after the group-therapeutic-practice. 36 therapists of them continue the clinical practice with handicapped children since then.

For the directions of our group for future are as follows.

1) The clarification of the relations between concrete methods and the significance of our group-therapeutic-practice.

2) The establishment of educational system for the growth as a therapist.

3) The consolidation of the solidarity between mothers and therapists after the group-therapeutic-practice.

4) The facilitation of the clinical practice connected with community.